特別展示:〈エミール・エルメス・コレクション〉より

このコレクションはエルメスの3代目社長のエミール・エルメスが始めたものです。エルメスが馬具工房から発達したことを忘れないように、そして職人たちに伝統技術を継承させるために集められた、馬と馬術への愛情が溢れるコレクションです。今回はそのコレクションの中から、近代社会への移行期にあたる19世紀中頃から20世紀初頭の、馬の文化に縁の深いオブジェを4部構成に合わせて展示します。日本はもとより、パリの本社からさえ門外不出だった作品も展示されますので、これを機会にこれらの歴史ある美しいオブジェから、馬と人のパートナーシップを再考してください。

ルイ=ジャン・デルトン(2代目)《馬を調教するテレーズ・レンズ嬢》1905年
Hermès Archives, Paris

参考写真:
撮影者不詳《揺り木馬に乗るシャルル=エミール・エルメス(2代目社長)》
Hermès Archives, Paris
出品作品:
揺り木馬、19世紀末
Emile Hermès Collection, Paris
エルメス家の人々に愛されてきたこの木馬は、現在、パリのフォーブル・サントノーレでひっそりと馬を愛するひとびとを出迎えています。今回は、パリの本社を一度も離れたことのないこの木馬を日本で初公開します。

アルフレッド・スティーグリッツ《終着駅》[『カメラ・ワーク第36巻(1911年10月)より]]
東京都写真美術館蔵

関連企画展のお知らせ

Equestrian Passion: Fulvio Cinquini
エクェストリアン・パッション: フルヴィオ・チンクイーニ展
2002年1月8日(火)—3月11日(日)[予定]
メゾンエルメス 8階フォーラム
東京都中央区銀座5-4-1 〒106-0041 Tel. 03-3569-3611 [水曜休館]

東京都写真美術館 次回展のご案内

リ・イマジネーション 未来の記憶—映像体験美術館[仮題]
2002年3月1日(金)—5月19日(日)

「馬へのオマージュ」展

主催: 東京都/東京都写真美術館/読売新聞社/美術館連絡協議会
特別協力: エルメス
後援: フランス大使館 協賛: 東京都競馬株式会社/花王株式会社
協力: 全日空/日本油脂株式会社/株式会社東京スタデオ/光村印刷株式会社/EPSON/ラーソン・ジュール・ニッポン株式会社/株式会社プロラボ・タック
助成: 国際交流基金

観覧料: 一般500(400)円/小中高校生250(200)円
地下映像展共通料金・( )内は20名以上の団体料金
*65歳以上の方、お身体に障害をお持ちの方とその介護者1名は無料

フロア・レクチャー: 毎月第2、第4金曜日 午後2時より

東京都写真美術館

開館時間: 午前10時〜午後6時(木・金曜日は午後8時まで/入館は閉館時間の30分前まで)
休館日: 毎週月曜日(月曜が祝日の場合は開館、翌火曜日[12/25、1/15、2/12]が休館)
および年末年始(12/28—1/4)
お問い合わせ: 〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Tel.03-3280-0099 Fax.03-3280-0033 http://www.tokyo-photo-museum.or.jp

ルイ=ジャン・デルトン(2代目)
(“馬上のロイ・フラー”を演じるテレーズ・レンズ嬢)1904年
Hermès Archives, Paris

THE HORSE—A Homage

「馬へのオマージュ」展

Sponsored by HERMÈS PARIS

'01 12月4日(火)—'02 2月24日(日)

東京都写真美術館
恵比寿ガーデンプレイス内

私たちの生活から馬がいなくなったのは、いつ頃のことでしょう。

現在、馬といって連想するものは、乗馬や競馬などのスポーツ、メリーゴーラウンドや木馬などの遊戯、美術やファッションに取り入れられ、ヴィジュアル化された馬の姿などでしょうか。しかし古代から馬は、人類にとってなくてはならないパートナーでした。近代化の波が押し寄せる19世紀中頃から20世紀初頭でさえ、馬はまだ都市、農村、山岳地帯等のあらゆるところで労働力として活躍していたのです。やがてさまざまな機械や発明品にその使命を取って代わられ、姿を消してゆくことになりますが、それは奇しくも写真が誕生し発達していった時代と重なっています。そのためか、写真史上重要な作品には馬をモティーフにしたものが数多く残されています。そして今なお多くの作家たちが、美しい馬の姿をオマージュを込めて撮っているのです。

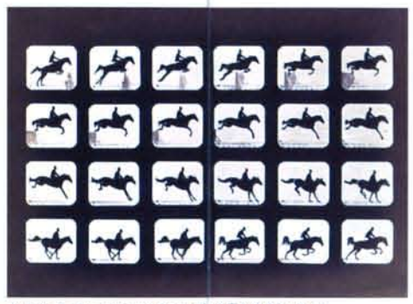
この展覧会では、当館の収蔵作品を中心にイードウィアード・マイブリッジやアルフレッド・スティーグリッツ等、近代写真の名作を多数紹介し、馬の姿を通して人と馬が織りなしてきた交流を思い起こします。また、馬を愛する現代作家の表現を新作も含めて展示いたします。

また今回は、写真の誕生とほぼ時期を同じくしてパリに創設され、馬具工房から華麗な発展を遂げたエルメスの特別協力を得て、そのコレクションから写真や馬に関わるオブジェを一挙に公開します。日本のみならず、世界でも公開される機会のなかった秘蔵品も展示される予定です。

21世紀に入って最初の午年(うまどし)にあたる2002年にむけて、約150点の作品とともに、私たちの中でいつまでも消えることのない馬へのオマージュを想起しましょう。

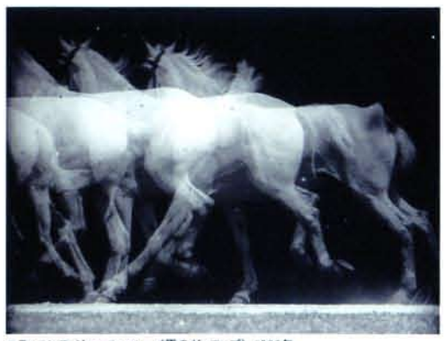
I Gallop 瞬間の写真

長年、画家たちを悩ませていた「馬の脚はどのように動いているのか、どのように宙を跳んでいるのか」という問題に答を与えたもの、それが写真でした。1878年、イードウィアード・マイブリッジがギャロップする馬の脚の瞬間撮影に成功し、従来描かれてきた兎のように跳ねる脚ではなく、馬にしか見られない美しい脚の動きをコマ送りで克明に写し出しました。これは映画の誕生の基礎にもなる発明でした。また、1880年には生理学者であるエティエンヌ=ジュール・マレーもクロノフォトグラフィという瞬間写真を相次いで成功させ、時間の概念や芸術表現に多大なる影響を与えました。



イードウィアード・マイブリッジ《ジャンプする馬の写真》1881年
東京富士美術館蔵

フェナキスティスコープ 19世紀 東京都写真美術館蔵



エティエンヌ=ジュール・マレー《馬のギャロップ》1886年

II Life with Horse 馬のいる風景

19世紀後半から20世紀にかけて、さまざまな近代文化が発達し、それまで馬が果たしていた役割は次第に鉄道や車、機械等が担うようになっていきました。第2部ではちょうど写真が社会に広まりだした頃、街や農村等で人と共に生きていた馬たちを写真家たちがどのように捉えていたのかを、アルフレッド・スティーグリッツ、アンドレ・ケルテス、エドワード・カーティス、木村伊兵衛、植田正治等、数々の写真史上の名作から探ります。

植田正治《農民》1935年 東京都写真美術館蔵
©Ueda Shoji Office

エドワード・S. カーティス《シェリー峡谷、ナヴァホ族》1904年
東京都写真美術館蔵

III Entertainment 馬との戯れ

人と共に暮らし、親しまれてきた馬であるからこそ生まれた、さまざまな遊戯に焦点をあてます。木馬、メリーゴーラウンド、競馬等のエンターテインメントや、馬術や競馬場から派生したファッションの世界まで、現在でも身近にあるテーマです。また、今回はエルメス・コレクションより、20世紀の初頭に開催されていた貴族による華麗な馬のサーカス〈モリエ・サーカス〉の写真作品を紹介します。世界でも珍しい貴族自ら馬を操るその見事な技と、馬の美しさ、優雅さ、そして技の瞬間を逃すことなく捉えている写真の技術も素晴らしいものです。

イジス《チュイルリー公園、パリ》1950年
東京都写真美術館蔵 ©IZIS

馬のおもちゃ 20世紀初頭
Emile Hermès Collection, Paris

馬"ダービー" 第二帝政(1852-70年)
Emile Hermès Collection, Paris

IV Homage オマージュ

古代から人類に深く関わり、さまざまなシンボルとなってきた馬の姿を、現代作家の作品から探ります。豊穣や知恵を運んでくるものの象徴としての姿。厳しい労働を共にするパートナーとしての存在。また、時空を超えた不思議な作品表現を可能にしてくれるモティーフとしての馬など、さまざまな角度から、そのオマージュを想起します。そして展示の最後は、あたたかく胸に響いてくる蹄の音が印象深い、映像によるメリーゴーラウンドで幕を閉じます。

伊藤義彦《歩趨・II》1999年 作家蔵
©Yoshihiko ITO

操上和美《無題》[『陽と骨』より]1974年 作家蔵
©Kazumi KURIGAMI